



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065 編集 坂野慎治 題字 島崎洋路

通年コース第十二・十三回開催報告

「炭焼き・きのこ菌打ち、復習」

『雨中の炭焼き』

降りしきる雨のなか、二十一年度の森林塾、通年コース最終回。まずは信州大学農学部からお借りした移動式炭化炉での炭焼きから。焚き付け

を包んだ煙道を作って中央に立て、地面には敷木を敷き詰め、その周囲に一ヶ月ほど乾かした西春近のヒノキ材をぎゅっと・ぎゅっしり三段に詰

め込み、さらにその上に木っ端と松葉を乗せて点火。重ね目や継ぎ目は、赤土を捏ねて目止め。雨水が炭化炉に押し寄せないように、排水溝をめぐらせる土木作業も。四段目と蓋を設置して煙突を付けたら、きのこ菌打ち。機械置場の屋根の下でコナラの原木に千鳥に穴をあけ、小屋の中

で木槌でシイタケの種駒を植菌。夕方には、島崎先生を交えた賑やかな忘年会を開催しながら、この間炭化炉では、何度か通風口を覗き、煙突を入れ替えたりして察止めとなりました。二日目は晴天となり、63.5kgの柔らかくて火付きの良いヒノキの炭を窯出しして、保科山林見学、あるいは測量・伐木造材・キャタトラ集材の復習現場へと出かけて行きました。それぞれの山歩きや作業を終えた後は、小屋へ戻って修了式。時には仕事を断り、時には地域の行事を断



いよいよ、点火



共同作業で

るなどしながらご参加下さり、ありがとうございました。今後も何らかのかたちで森林に関わりつつ、同窓生として連絡を取り合ってもらえれば嬉しい限りです。お疲れ様でした。



中は太い材、外は細い材

今回の内容

通年コース

第十二・十三回

12月11日(金)

炭焼き・きのこ菌打ち

8時30分

鳥崎先生の山小屋に集合。あいにくの雨。中央道の事故通行止めの影響で何名かの方が遅れるそうなので、その間、DVDを鑑賞。

9時20分

日程説明の後、鳥崎先生の挨拶に続き、早川講師から炭の性質や移動式炭化炉での炭焼き方法などの講義を受ける。今回の材料は、間伐 集材 で伐木造材した西春近のヒノキを使います。

10時

身支度をして、まずは煙道作り。炭焼き場の整地をしたら一段目を設置して、中央に煙道を立て、敷木を地面に敷き詰める。薪材は中央に太いもの、外は細いものをぎゅっと・ぎゅっしり。二段目も三段目も。そして、木っ端や松葉を山と積み、

11時

いよいよ、点火。

11時40分

小屋にて昼食。炭化炉に四段目を設置して木っ端を追加。

13時15分

きのこ菌打ちに関する講義の後、炭化炉の四段目に蓋をして、煙突を立てる。

14時15分

きの菌打ち開始。コナラの原木に、高速ドリルで千鳥に穴をあけて、木槌で森産業のシイタケ種駒を植菌。地面に落ちた種駒は廃棄して下さい。炭化炉の様子も見つつ、

15時50分

菌打ち作業を終了。

16時

講師講評。講座を一応終了し、忘年会の準備と炭焼き番。

18時15分

講師忘年会開始。酒を酌み交わしながら、ときどき炭化炉の様子を見て、煙突を移動させたり、空気を塞いだり。

23時55分

そして、窯止め。

12月12日(土)

復習

8時30分

鳥崎先生の山小屋に集合。今日は晴天。日程説明の後、早速身支度をして炭出し。雨中での炭焼きにもかかわらず、なかなかの出来栄えて、63・5キロのヒノキ炭ができました。

9時30分

今日の復習は、見学班・測量班・伐木造材班・集材班に分かれて。見学班は長谷へ出発。

10時

測量班は小屋隣の林分で外業開始。伐木班と集材班は、小屋下の林分で伐倒とキヤタトラ集材。

12時

作業班は小屋で昼食。

13時

測量班は製図。伐木班と集材班は作業を再開。

15時

測量班も合流して、最後はコナラの伐倒で作業終了。

16時

修了式。ほとんどの方が皆勤・精勤。KOA森林塾へのご参加、本当にありがとうございました。今後もしばら森林とかかわりを持つて、森林塾ともお付き合い下されば幸いです。お疲れ様でした。

参加者/安部(貴)さん、安部(英)さん、池中さん、大槻さん、荻上さん、沖永さん、加藤さん、熊沢さん、栗本さん、島谷さん、武田さん、増田さん、山崎さん、水野さん、熊木さん、園田さん



仕上げは、コナラ



最年長、皆勤!

# リレー通信

## 森の中に増殖していく リテラシー大学



「ドン・キホーテはチェンソーとチルホール、鑿と鉋、すこしばかりの本を担いで、冒険の海に出ていく」

沖永 哲哉

私は、夢みている。各地の森の中に増殖していくリテラシー大学を。

リテラシーとは何か。ここではリテラシーとは「人が身につけておくべき、基本・基礎」ということにおこう(註1)。大学というは、青年を対象とする学舎というほどの意味合いだ。名称は青年塾でも青年学校でもよいし、共学舎でも共立学舎でもよい。

この大学には、自立をその志とする若者がひとりふたりと集まってくる。基本は共同生活と学習だ。通いもあり得る。学習は、実践を伴う学習

を旨とする。幕末ならば、このような学習は稽古といった。今は、体験学習法による体験学習という。考え、実践し、実験し、考えを修正しながら身につける。いいかえれば、プラン・ドウ・シーのサイクルをまわす、仮説と実験のサイクルをまわす、山造りの一人親方鳥崎先生の言葉でいえば、「物事の是非を問いつながら、その物事に対する対応の積み重ねが人間社会の文化である」(山造り承ります(川辺書林))との考えを基調とする。対応のない是非への終始と是非をあらかじめ問わない対応は無力である(註2)。

コアカリキュラムは、リベラルアーツ・リテラシーと生活力リテラシーだ。リベラルアーツ・リテラシーの内容は、今のところ私の研究テーマにあわせて「由良君美(英文学、比較文化)と板倉聖宣(科学教育、科学史)の間」ということにおこう。二人とも幅広い領域を対象とする人だ。その専門も発想も異なるふたつの多面的結晶体の交差点、科学と技術と教育の交差点、観念論と唯物論が交差するその接点が私には実に興味深い。

生活リテラシーの内容には、文字どおり掃除、料理、健康といるいろいろあるが、ここでは「大工ときこり」の仕事

その中心において組み立て、考えてみたい。入学者は、先人の建てた学舎や宿舎を利用して貰うが、卒業時には次世代のための学舎や宿舎の新設に加わって去ることが義務となる。このリテラシー大学では、学舎も自分で建てるのである。同時に山づくり同志会でもある。重機運転とPC活用は必須課目だ。刃物研ぎも当然。掃除、洗濯、料理、どれをとつても誰かがやってくれるわけではない。他人のを助けることはあつても。

森の中の大学だから、そして全員がときこりと大工の仲間だから、自然・環境リテラシーと林業リテラシー、建築リテラシーは自ずから比重の高いカリキュラムとなる。またこの大学は、仲間の資格取得支援のための予備校の役割を担うこともある。

忘れてならないのは、食と身体だ。大工ときこりの仕事の基礎には体と身体の動かし方の探求や安全の探求は欠かせないものだ。学びの基盤には食と睡眠を始めとする健康や生活リズム調律の問題がある。人間生活の基礎は本来的に体づかいだ。そしてわが大学経営には「暗黙知」を活用した、いわば「体育会」系的ナレッジマネジメントともいふべきものを必要としよう(勝海舟をみよ。あるいは、森を育てる技術(川辺書林)の



著者内田健一や比較文化の稲賀繁美、そして本多静六、果ては自強術(じきょうじゅつ)の小林良彰や松濤會(しょうこうかい)の廣西元信を参照のこと。

コアカリキュラムのまわりには、金融リテラシー(何よりも自立を志し促すための必須項目だ。拠点となる山も電動工具も車両も自分達で賄わなければならない。今は、やる気になればファンドも銀行も自分達でつくれる時代だ。そのためには二宮尊徳からも大いに学ぼう)、経済リテラシー(信用と所有と財政について素朴に考えてみよう)、政治リテラシー(世界的課題である官僚制批判について根底から考えてみよう(註3)、歴史リテラシー(先人の経験を踏まえるために、そして歴史的忘却を回復するために)が配置される。あとは、個々人が目標とするものを学んでいけばよいの

だ。舞踏や武術の稽古もあれば、生態学やバイオマスの研究もあるだろう。余裕があれば、間伐や建築を中心とする副業を盛んにし、地域へのボランティア活動

に従事し、雪かきや被災地のボランティアに出勤し期待されるぐらいのパワーを備えたい。

本大学での研究スタイルは、とりあえず「知恵の職人(楽知ん研究所)」やそれを引き継ぐ「楽しい知の技術(仮説社)」に表明されている、知的エンターテインメントとしての研究、最も本格的な研究書は啓蒙的でもある、等のテーゼを出発点としてそのあり方を探して行きたいものだ。

また、図書館とともに教材揃えと個々人の研究成果の発表や、学んだことを社会へ還元するために、本と映像や電子出版のための自立した自力によるマルチメディア出版所、大学出版局も大学に付属させたい。

並行して、キャンパス内の遊休施設・土地活用の一環として篤志家からの寄贈文庫の選択的受入や愛書家の書庫設置受託なども考えてみたい。

井上ひさしの山形県川西町の遅筆堂文庫やポロニーヤ方式の紹介、稽古場・舞台としての廃校の活用、山口昌男の大学構想やかつての福島県昭和村旧喰丸小学校の書庫等への転用、福島県只見町の吉津耕一の「たかもく本の森」や「たもかぶ本の店」の経営、新潟県湯之谷村のお寺に設置された科学の碑記念館等々の営為の中に色々と将来参考にしてきる点があるのではと考えているのである。

かつて明治の時代、東京芝の増上寺に置かれていた開拓使仮学校から分岐してできた論衡社という組織があった。しかし、私塾関係の著書もある高野澄の評(「怒濤の時代(徳間書店)」)によれば、自分たちで資金を集め、自分で教師を探してくるといふ論衡社型の学問機関はその後日本ではついに根を下さなかった。

このことである。一方で大学の嚆矢ポロニーヤ大学は協同組合型ともいふべき設立経緯だったと聞き及ぶ。今後、その協同組合型(労働者協同組合を含む)をはじめとして、企業組合・事業協同組合・合同会社(LLC)・有限責任事業組合(LLP)・NPO法人

の個々について、各種の社会的起業の事例を参考にしながら一体全体我々にとってはどういうような設立方式が可能であり望ましいのかについて具体的に学習をすすめ模索してみる必要がある。

あわせれば、将来総合大学になるかもしれない。今発言するとそれは文字どおり戯画に等しい構図だが、市内の十三の地域に分散して成立しているパリ(ソルボンヌ)大学のような大学に、三十一くつかの特色あるカレッジで構成されるイギリスの古い大学のよ

本多静六のようにとまではとても及ばないだろうが、ひとつひとつが山持ちのこのリテラシー大学は、同種の新しいリテラシー大学の設立と増殖に助力する。物心両面から

学舎は、ローコストのセルビルドといても、基本は「次の世代に引き継げる」本格的な木と土の建築でいきたいものだ。家具もまたそうありたい。可能なかぎり堅牢か

つ美的であること。「ロココストは建築のエレメントである。しかし、人間の生活や精神を引き上げられるロココストでなければならぬ」「白井晟一「試作小住宅」(無窓(筑摩書房))。そういえば、出自が素人の若き建築家白井

武道場、研究室、図書館、出版所、演習林小屋、出作り小屋等々を計画的に配置していくのである。

この森の中のリテラシー大学は、勝海舟や坂本竜馬(そして横井小楠)の關係した、海舟私塾、長崎海軍伝習所、神戸の海軍操練所、龜山社中、海援隊、そして維新後の静岡、庄内、薩摩、北海道等における元土族の開墾や周辺人物の留学、私立の専門学校や大学設立の系列に範をとるものである。海と海軍が、現代では森と、きこりと大工の同志会に置きかわるのであ



る。そして、当時の洋船取得が山林取得にあたるのである。そう、「森の中のリテラシー大学」という奇天烈な視点で幕末の一連のながれの中の細部を見直していくとき、多くの興味深い発見に満ちていることに驚かされる(参照：松浦玲、高野澄、飛鳥井雅道、小林良彰等の明治維新を巡る諸著作)。

ところで、果たして現実的可能性はあるのか。ある。現に、わが伊那の K O A 森林塾、グリーン・マイスター研修、飯能の大工塾(丹呉明恭と山辺豊彦)、高橋修一の住まい塾、近山スクール、各地の自己犠牲的な教員(わが導師、大月市真木にお住まいの大工の一人親方田中勇棟梁をみよ)による職業訓練校、高等技術専門学校での講習、楽知んファンド、楽知ん研究所、西村肇氏等林立する個人ゼミ、個人研究所、道場、ウェブ上のゼミ、はたまた各地で展開されるわくわく科学教室や仮説サークルをみれば、これらのめざましい教育実践のひとつひとつが森の中のリテラシー大学の原型になる細胞そのものではないだろうか。リテラシー大学の原型細胞はただいま各種増殖中である。今必要なのは、細胞融合により新しいタイプの大学を創りだすことである。めばしい講習を選択的に有志数名が代表

で受講してきて、それを本大で他のメンバーに教授するのである。教えることが、最高の学習であるとはよくいわれることではないか。

私の実現すべき目標としての現実的可能性はあるか。ない。着手が遅すぎる。まだ山林を所有していない。資金もない。カリキュラムの基礎とすべきコンテンツが、未だ何ひとつとして、目にも見える形をとっていない。建築着手も「沖永リテラシー研究室」の法人格取得もまだ。ホームページすらまだない。なによりも信用と実績が不足している。着手点というべき端緒の細部が未だ具体的でない。でも、やれるところまでやってみようではないか。それで十分満足だ。世の人はこの類の夢を妄想という。狂夢ともいえよう。が、挫折前提であつてもこれは楽しい人生になるのではないかと今は考えている。ドン・キホーテはチエーンソーとチルホール鑿と鉋、すこしばかりの本を担いで、冒険の海へ出ていく。止むに止まれぬ衝動を基に、端緒をどう形成し形づくるか。「積小為大」を旨として、出発点となる原初の核をどのような日程でどう具体化するか、ここが、今、私が踏み込んで力を傾注すべき一点であろう。

最後にここ数年私が気に入っている言葉をふたつ。「自然の中での肉体労働は世界共通の教養なのではないか」、「森づくりの明暗(川辺書林)(内田健一)からの引用である。「未来を予測する最良の方法は、未来を創り出すことだ」、この私も畏敬している米国のコンピュータ科学者アラン・ケイの言葉は、「おい山へ行こうよ(伊那毎日新聞社)」の中の、後藤知之氏の文章からの孫引きである(註4)。

蛇足：由良君美の父君・由良哲次は二宮尊徳の徒であり哲次の死後、残された財の各所への寄贈に君美は奔走した。財を成したことで有名な林学者の本多静六もまた二宮尊徳の徒である。板倉聖宣は尊徳の研究も相馬藩の人口推移の研究とから行っている。勝海舟も西郷隆盛も尊徳を尊敬してやまない。そして「たかもく」のキャラクタは紛れもなく二宮金次郎に似ている。論衡社も調べてみれば尊徳と無関係ではないかもしれない。この稿のあちこちに二宮尊徳が顔を出してくるのが我ながら面白い。新山購入からスタートした二宮尊徳はこの稿の隠れたひとつのキーワードなのである。ただし、私の二宮金次郎、二宮尊徳にいだくイメージは戦前の報徳会思想のそれとはすこし異なる

ようである(註5)。なお、本稿は K O A 森林塾の「森林塾通信」への寄稿をひとつのきっかけとして執筆したものである。戯文としてではあれ私のこれからの立脚点を整理し確認するのに非常に有益な機会であった。「森林塾通信」へ寄稿したものは本稿の要約である。) K O A 森林塾に感謝する。

(註1)「リテラシー欠損」と「リテラシー戦略」『全国青年の家だより 第105号』H18.3.31  
(註2)「アクティビティ集」『模倣からはじめよう』『全国青年の家だより 第104号』H17.9.10  
「ワークキャンプ小論」『全国青年の家だより 第105号』H18.3.31  
(註3)「外部効率性」と「内部効率性」『外部効率性追求は難しい』『全国青年の家だより 第104号』H17.6.10  
「官僚制度に必要とされるいくつかの原則」行動明示による応答責任原則・避及責任追及原則・任用期間制限原則・密告被害抑止と情報公開の原則」(H20未発表)「寄生虫論・寄生獣論」(H20未発表)  
(註4)「私の2009年の

年頭の誓い 森の中のリテラシー大学設立にむけて」H20未発表  
(註5)「よみがえる二宮尊徳」次代を担う青年リーダー」のイメージ形成について」H20未発表

師走に入り寒さも一段と厳しくなつてまいりました。楽しかつた森林塾も数日後には忘年会をもつて終了となりました。あつという間の一年間でした。森林塾ではいろんな事を学びました。なかでも印象に残っていることは、保科先生の言葉です。「思いつきだけで林業に入つてもらつてはこまる。また正義感だけでもうまくいかない」と言われまし

# リレー通信

## はじめの一步



手選 杉森

た。まさしく私はいつか思いつきで森に入つてきました。趣味の幅を拡げようといった程度です。しかもいくつかある私の趣味のなかでは、森林に携わることは、環境問題を振りかざして正義を理由付けすることができません。まさに格好のステータスであります。こんな不埒な私の態度を戒める実に重い言葉でした。かみしめながら着実に歩んでゆかねばと思いません。

私には多くの趣味がありませんが、先日私の主たる職業である福祉の領域での研修会に出席したとき、講師の話に「自分の趣味を三つ以上すらすらといえる人は認知症になりにくい」というデータがある。しかしこのような研修会に出席する人間はほとんど堅物ばかりで仕事のことしか考えていないだろう」とありました。私はすかさず手を挙げました。私はすかさず手を挙げたが、講師は「君は認知症にならないことが保証されていますね」と笑っていました。私はすかさず「もうすでに認知症みたいなものですか、心配していません」と続けました。国内でもっとも有名な認知症ケアの第一人者にもかかわらず、向こう見ずにもこんなやりとりを平気でやるというのも、私の悪趣味の一つです。また、ある漫談家が「年



をとつてもほげにならない秘訣は、はじめから呆けていることです。そうすると医者には解らないのです」とふざけていました。実は私は半分はそうありたいと思っていますが、認知症の予防はともかくとして、軽はずみな趣味として森にかかわることは戒めなければならぬと思います。

平林先生からは基礎技術をしていねいに教えていただきました。不器用な初心者である私に、根気よく繰り返し指導してくださいました。感謝しています。始めて立木を倒したときの事ですが、平林先生は切り株の中央に笹の枝をのせて手を合わせ、昔の木こりは皆こうしたものだ。木の命をいただいたのだから」と諭してくれました。感動的なシーンの一つとして残っています。それ以来、木は生き物だということをこさらに意識するようになりました。ふと考えてみればこれまでほとんど意識していなかったこと

に気づきました。たとえば、「世の中でもっとも大きな生き物は？」と聞かれたら、鯨か象かあるいはそれらしいものを考えようとしたでしょうが、今では確信を持って、「木です」と答えることができません。そして勉強した結果、世界最大の生物はカリフォルニアの森に生きるセコイアであることが解りました。高さ百メートル、直径は六メートルをはるかに超え、その樹冠には分厚い土壌があり、そこにはシダやハックルベリーといった低木が茂り、鳥だけではなくリスや補食動物が暮らす小さな森があるという、想像を絶する世界を知りました。そして図らずもこのセコイアは、私が森林塾開講の際の自己紹介で「花粉症の元である大嫌いな杉の木を伐るためにやってきました」と半分ふざけて話したその杉の仲間であることも知りました。

こうして森林塾で学ぶうちに少しずつ私の周りの植物は「ただの木」ではなくなってきました。ひとつひとつを違つたものとしてとらえようとしていることに気づきました。森林塾第一日に早川先生から教わった樹木分類も大いに役立つようになっていきました。公園の隅で空に

突き刺すように枝をのばしている樹木が、秋になって黄色に色づきハート型の葉っぱを地面に積み上げていく景色を見ながら、葉っぱを拾って掌状脈であることを確認して、これはカツラの木であるという悦に入っているといった風です。愛犬の散歩の際には街路樹の葉っぱをちぎり、葉脈や葉縁を観察し互生・対生を見たりして樹木を特定することが面白くなってきました。が、確たる証拠をつかむことができずしばしば植木屋に教わったりもしています。今では愛犬も私のこの仕事に興味を持ってか、私がちぎった葉っぱを見上げながら時々同じように葉っぱに飛びかかってくるようにもなっています。

愛犬との共同作業で特定できるようになってきた樹木は、ナンキンハゼ・ケヤキ・マデバシイ・タブノキ・クスノキなど少しずつ増えてきていますが、なかでも気に入ったのがメタセコイアです。見事な紅葉を見せてくれるのが、またまた杉の仲間であったのに驚きました。こうしてついでこの前まではただの緑でしかなかった周りの植栽が、生き生きとした命あふれる姿で私にせまってくるという、躍動的な別世界を感じとれるようになったのも森林塾のおかげだと思えます。

おもしろ半分と怖いもの知

らずで参加した森林塾ですが、こういった私を戒めるように技術講習は厳しさをもっていました。この緊張感にもまして私の目の前に大きくどつしりと息づき、何万年もの歴史を背負いながらこの私を静かに包み込んでくれる無言の森林こそが、非力な故に生意気な私に対して諭すように語りかけてくれるように思われます。森林塾のおかげで木や森や自然にかかわる第一歩を歩めるようになったと思っています。この「はじめの一步」は、過去からの自分の延長に継ぎ足した接ぎ木の一步ではなく、過去の自分をも生き返らせる地ごしらえからの実生の更新です。

リー通信のバトンもいよいよアンカーの手につながれようとしています。何とか書かなくてはむむよよと密かに願っていました。ついに年貢の納め時となり、もうこの時期にもなつたので今更自己紹介もないだろうと、思いつくままに書きました。森林塾への感謝の気持ちをつづることになったようです。で、最後にふれることとして、間伐実習で倒したサワラの木を使って自宅の脱衣室の改修を行うことになりました。森林塾の活動を私的に流用させてしまい申し訳ないようにも思いますが、塾の教科の一つである市場の見学を期に思

いついたことです。そのサワラの木は、厚さ四センチの床板数十枚に加工されました。忘年会の後、愛車に積んで大工である友人の元に届けます。来春にはさすがに脱衣室ができあがる予定です。「木を活用しつつす事は森の命を受け継ぐ方策の一つである」と、自分に都合よく解釈して楽しませていただくことにします。

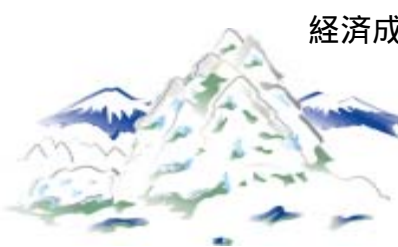
「はじめの一步」を緊張しながらも楽しく確実に踏み出すことができたのは、丁寧に指導していただいた講師の皆様のおかげであると感謝いたします。また、不慣れで足手まといな私を、あたたかく支えてくれた同期の塾生の皆様の方でもあります。短い時間でしたが私の悪い酒癖にも何度かつきあっていたいただき、伊那の居酒屋では森・三兄弟も結成できました。駒来屋茂森、電脳屋遊森、手遅杉森の三名です。駒来屋氏はこの名を名乗って一人親方として独立就業したいなあと思つていそうです。電脳屋氏も IT 事業から転身し九州での木こり稼業を検討中ということですが、私、手遅は森林塾の成果を生かして来春から杉の間伐をこつこつとやりたいと考えています。

同期の皆様方には、今後ともおつきあいのほどをお願いし筆を置きます。

# リー通信

経済成長の時代に生まれて

増田 和朗



私は一九六二年(昭和三十七年)に横浜市の中部に位置する保土ヶ谷区に生まれました。横浜という「海」「港」のイメージを持つ方も多いと思います。横浜市はとても広い街で多様な面を持っていますが、保土ヶ谷区は海には面しておらず私の生まれ育つた辺りは丘陵地帯で坂の多い地域です。相模鉄道線で横浜から五駅目「和田町」の北側にある丘陵の南の斜面の上の方にある家で育ちました。丘陵の下には国道十六号線が通り交通量も多く、住宅も多いのですが、それでも雑木林や公園、空き地、畑も所々にある地域でした。



いことだ」とCMが流れ、「モノの大量消費」「便利に速く」が美德の時代。電動鉛筆削り器で鉛筆を数秒で削ってしまう友達がいりたり、おまけのカードだけが目当てでスナック菓子が道路に箱ごと捨ててあったりと、子どもの心にも資本主義の悪魔が住み着いていく時代であったのかなと思います。また周辺の畑、林、空き地が次々とつぶされ住宅、マンション、駐車場へとどんどん変化していきました。

私の育った家の西側はちよつとした森に隣接しており、特に柵などもなかったの地とは知らずに自由に入り込んで遊んでいました。父親が木にロープをつけてくれてターザンごっこをしたり、気に入った木を基地と称して何をやるわけでもありませんが、登って枝に身を任せてボケツと時間を過ごすこともよくありました。その頃に触れていた木の感触(木の電信柱もまだありました。いつも遊んでいた近所の狭い空き地の両端二箇所にあつた電柱の裸電球の点灯、消灯をよく朝夕やっていたのを思い出します。いつの間にかコンクリ電柱になっていました。)をなんとなく覚えており、森林塾で多くの木に触れ懐かしさを感じました。

私が物心をついた頃は昭和四十年代の高度経済成長期。TVからは「大きいことはい

に二ユースの題材になっていました。そしてまさかのマンション建築の嵐がついに隣の森を襲ってきました。父親は市議への相談、署名集めをしたりしていましたが、何の歯止めにもならず工事スタート。

父親から「いよいよ伐採が始まる」との連絡を受け、数日後私は自宅から、また他の何箇所から裸になった無残な森を撮影しました。喪失感でいっぱいでした。前後して母校の中学校の裏山の傾斜地も同様にマンションに化けてしまいました。そのままでは利益を生み出さない森も、都心まで近いという点から関係者にとっては宝の山ということでしょう。

中学生ぐらいになると隣の森に入っていくこともそれ程なくなりまして。周辺は変化するけれども、「こんな傾斜地の森だから開発されることはないだろう」と勝手に思い込んでいました。実家を離れた後も、正月などで戻ると、森の存在にホツとしたもので

時が過ぎバブルの頃。「億ション」やら「土地転がし」やらで金儲けの話が毎日のよう

自宅の西側にはフェンスが立ち、南西側にマンションの壁が立ちほだかる。幸いなことに建物本体までは多少距離があつたので圧迫感は余りありませんが、それでも南西の空は狭くなりました。和田町の駅からも見えた自宅周辺の懐かしい緑の大部分は失われ、残されたわずかな緑もマンションに押し込まれ悲鳴を上げているように私には感じます。

森林塾への参加をきっかけに戦後日本の森林の変化を知ることができました。「拡大造林」「木材価格・需要の低下」「間伐不足」「林業就業者

の高齢化」等々。林業が抱える課題は、自分が生まれ育った時代には、しかも自分の生活の中では見えないところで自分の成長と同時進行で生まれていったことに気づきました。効率よく迅速に経済的利益を求め現代の資本主義と、五十年後、百年後の利益を生むために二代、三代に渡ってこつこつと取り組んでいく林業。この二つの価値観を合致させることはとても困難なことだと容易に想像できません。

「地球温暖化」による危機が叫ばれ「環境保全」「エコ」などの価値が高まっている中、(個人的にはこれらの動きはとても表層的だとも感じますが)今回森林塾に参加できたことで、今後の人生は森と関わっていききたいという思いを強く持つようになりました。それは、どんな価値観をもつて生きていくのかを探求していくことでもあると思います。森林塾で出会うことのできた指導者、参加者の方々の「森に対する思い」から学ばせていただいたことを忘れずに生きたいと思っています。



樹のコラム

さるまめ 蕨豆

ユリ科 シオデ属

一見して草本とまちがえそうなの植物。樹木に分類されるとは思えないくらい背丈の低い植物なのですが、非常に愛らしい姿をしていて私はとても好きです。背丈は20cm〜50cmになり、葉は全縁、広い楕円形か又は長い楕円形になります。基部から三〜五本の平行脈があります。花は五月で白くて小さな花が咲きます。

初めてこのさるまめに出会ったとき、葉っぱの付き方がおもしろいと思いました。普通、葉は表面を空に向けてお日様をたくさん浴びようとするようになっているので、このさるまめの葉は先端が上を向いて付いていて、まるで、蝶が枝にとまっているように見えました。しかも若葉の頃の葉の縁は、紅色に縁取られていて、よけいにそう見えて一目惚れのな、とても印象的な出会いでした。



果実は直径6mm〜8mmで秋に赤く熟します。雪が降る季節でも枝に実が付いていて、白い景色の中、赤いこのさるまめの実を見つけると何だかうれしいような、いじらしいような気持ちになります。さまざまな植物が、暖かな春の日差しに誘われて芽吹く季節に歩いていると、ついつい上ばかり目が行きがちになりますが、足下にもちゃんと咲いていて、踏まないように歩くのはなかなかたいへんです。「鶯」

おわりに

広葉樹の樹木検索から、針葉樹の調査や間伐・集材：という一連の講座で、KOA森林塾は皆様の期待に応えることが出来たでしょうか。これからもお付き合いをして下されば幸いです。ありがとうございました。お疲れ様でした。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。

TEL 0265-70-7065 FAX 0265-70-7994



E-mail: sh-sakano@koanet.co.jp ki-hayakawa@koanet.co.jp 携帯:090-4463-0062(開催日) URL http://www.koanet.co.jp